

---

私がなぜ現在の科目を選んだか

---

## 「遺伝子診療部」

信州大学医学部附属病院遺伝子医療研究センター

高野 亨 子

平成25年10月に信州大学に赴任以来、遺伝子医療研究センターで診療を行っております。医学部卒後は小児科医としてスタートしたので、将来、遺伝子診療部で働くことになるとは予測だにしておりませんでした。

卒後6年目に大学院に入学することになり、小児の神経筋疾患や発達に興味を持っていたため小児神経を専攻することにしました。与えられたテーマが「Prader-Willi 症候群のゲノムインプリンティングに関する研究」で、この時に遺伝学および分子生物学の基礎を学びました。学位取得後、国立精神・神経医療研究センター研究所と米国 Greenwood Genetic Center にて知的障害の遺伝子解析を中心に研究に従事しましたが、研究で大きな成果をあげられず、行き詰まりを感じ、帰国後は小児神経の臨床に戻りました。小児神経の現場では遺伝性疾患や先天異常症候群と出会わない日はなく、

---

私がなぜ現在の科目を選んだか

---

## 「脳神経外科」

信州大学医学部脳神経外科学教室

藤 井 雄

なぜ私が脳神経外科を選んだか？この問いは、なぜ私が医師を志したか？が強く影響していると思います。開業医であった祖父の影響もあり、幼少のころから医師という職業に対する憧れがありました。また祖父が産婦人科医だったこと、幼少期から細かい作業が割と得意であったこと、手塚治虫が好きでブラックジャックに影響されたこと、などなどの積み重ねがあり医学部に入学する前から外科系の科目に興味がありました。大学に入学すると、勉学以上に部活動に勤しむ体育会系の学生となっていました。ポリクリで様々な科を回ると、やはり外科系の教室の方が居心地がよいように感じ、ますます外科系に進みたいと思うようになりました。

そんな外科系の科目の中で脳神経外科は、在籍していた硬式テニス部の顧問が本郷前教授であり、もともと馴染みのある科でした。他の外科系科目と一番違う

また遺伝医学に明るい上司に恵まれ、遺伝子解析共同研究も盛んに行われている環境でした。小児神経の診療と共に遺伝学的検査に関する遺伝カウンセリングを行う日々を過ごしていた際、前遺伝医学・予防医学教室福嶋教授より、信州大学赴任の話をいただき現在に至っております。

現在の仕事は小児の遺伝性疾患の臨床診断・次世代シーケンサーを用いた遺伝学的診断・研究および遺伝カウンセリングが中心ですが、幅広く遺伝医療に関わっております。当診療部は基本治療をしない部門で、メインの診療科となることは少なくコーディネーター的な役割を持つことが多いです。しかし、遺伝学的確定診断が治療方針の決定に関わることもあり、非常に重要かつ責任のある立場と考えております。振り返ってみると自分で選んできたというより周囲に導かれてこの分野にやってきたと感じますが、様々な立場で仕事をしてきた自分にとって経験を活かすことができる遺伝子診療部は案外合っているのかもしれないと感じております。

(北大平7年卒)

と思ったのは、顕微鏡手術が主であるため、助手や術野外の学生でも術野がよく見えるという点でした。また解剖で見た脳とは違い、「生きた」脳はみずみずしく美しく感じられました。

またちょうどポリクリで実習していた際に、カンファレンスを英語で行ったり、教室の歴史について英語での発表予行があったり、海外留学生が在籍していたりして国際的な雰囲気を感じました。初期研修でも脳神経外科を選択し、急変した患者さんを治療する先輩医師の姿を見て、やりがいのある科であると感じました。このような人との縁、学術的興味などいろいろな要素があり、脳神経外科を選択しました。

脳神経外科の中には脳血管障害、脳腫瘍、脊髄障害、外傷などさまざまな分野があります。また治療法として顕微鏡手術だけでなく、内視鏡手術や血管内治療などさまざまな治療があります。一つの手術にかかる時間も短くはなく、術者として経験できる絶対数は少ないのかもしれませんが、その分一つ一つの症例を丹念に検討し、治療を計画することができます。実際に脳神経外科医になって十余年が経ちますが、日々の勉強を惜しまず、患者さんにベストな治療を施せるようこれからも精進していきたいと思っております。

(信大平18年卒)